

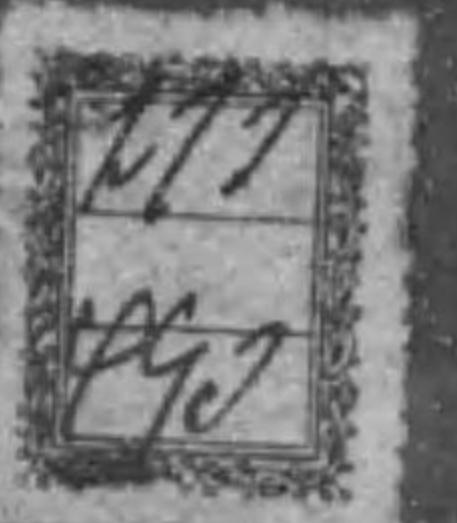
始



5 6 7 8 9 18 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18

特116

7/7



地拍子附
大小鼓太
鼓手配附

小袖与我

内五十五

物116
717

五月
狂ツツツシ
吉レレテ
曾我十郎
家人團五郎
春母日局

曾我十郎
吉レレテ
曾我十郎
家人團五郎
春母日局

小袖曾我

四番目(畠二番)

備
(コイ合)
(カジ三)
の如く赤色活風は高安流大鼓
(ツミケ)
の如く藍色活風は昌野流大鼓
打放
の如く藍色は幸流小鼓及
等の如く赤色活風及
世流本鼓

備
(コイ合)
(カジ三)
の如く赤色活風は高安流大鼓
(ツミケ)
の如く藍色活風は昌野流大鼓
打放
の如く藍色は幸流小鼓及
等の如く赤色活風及
世流本鼓

《出ノ囃子》

次第

三拍

四拍

五拍

六拍

七拍

八拍

九拍

十拍

十一拍

十二拍

十三拍

十四拍

十五拍

十六拍

十七拍

十八拍

十九拍

二十拍

次第
ヨリ合
平素
ソイ合
シテ
剛吟
上音
拍
三拍
四拍
五拍
六拍
七拍
八拍
九拍
十拍
十一拍
十二拍
十三拍
十四拍
十五拍
十六拍
十七拍
十八拍
十九拍
二十拍

正
10.6.
内交

地取

大小鼓はアシライをキツ(コイ合) ラキ

これは曾我の十郎、林成にてひさても頼

朝富士の序狩に、序出でひ間。我等も元り
出でひ。またこれなる時致は。海にてひ者の
勘當にてひ程に。申し直し連れて序狩に
残り出でばやと存サシ_{五郎}^{上音}時アシテ_{五郎}^{上音}しも頃は達タク_{アシテ}
四年。五月半の富士の雲。五月雨雲に降り
交ぜて。康の子まだらや村山の祐野の
麻の星月夜。鎌倉殿の序狩の序遊ゲイげ

にたぐひなき摩マ事トコトかナ_{トコト}^{上音}東トコト八箇ハチ國コトの
兵ヒども皆ハシマ摩マ供トコトに余ヨリるなれば。_{トコト}^{五郎}空アムめて敵トコト
の祐經ヨウキも。摩マ供トコト申シさぬ事トコトあらじトコトたとひ
詩シつまで。事トコトは莫豊マツタツの鹿トコトなりとも。想トコト
ひて。忍シムばやと大丈夫トコト。狩人トコトに絶シムれ打ち
出シムづる

下歌ヤトギ
中音ミドリ
小曲コトブキ
元音カタカタ
前音マジカタ
四音ヨリカタ
五音ゴンカタ
六音ロクカタ
七音セブンカタ

ヤ
ヒ
と
知
れ
エ
ぬ

トリ

おほほうちやまのやまもりいも

●上歌
木かくれて。

上音

隠

木

か

く

れ

て

る

それとは見えじあづさゆみ

と

は

見

え

じ

あ

づ

さ

矢ごろにならばしがよかむ

矢

ご

ろ

に

な

ら

ば

し

名をすけつねを射どぞめて

名

を

す

け

つ

ね

を

射

キ四

キ四

キ四

キ四

キ四

●詞曲
これに背く席待ちトヘ。某参りて案内を申

さうするにて。如何に案内申しつ。^{狂言}誰

にて。産ひぞ。や。祐成の席参りにて。

^{十郎}さんば某が余りたる由申しつへ

^{狂言}累つて。大方殿よりの席後には。祐成の

席余りならば申せ。時致の席余りなら、

ば申しそと併せ出だされて。 ^{十郎}ただ某

が余りたると、申しつへ ^{狂言}如今に申し上げ

ト祐成の席余りにて。 ^母計方へと申しつ

ヘ。あら珍らしや。十郎殿。いづくへの、席ぞ

や。母がために、懲とはよも。 ^{十郎}さんば久しく

余らずに。顔に、向顔のため。又は富士の席

狩と申しつ。程に ^母さればこそ思ひし事

よ。君がため。席狩に出づる席ぞや。 ^{十郎}いへ

つしか穂子の席戯。珍らし顔に、變まじや

と 五郎 恩ひながらか時致は。不孝の身な

れば物の隙より

以下平乘 当セラハ 地上音 た高

か

間

ア

の

マ

の

ミ

イ

トリ

そ

に

お

な

じ

子

に

見

て

や

止

み

ね

の

お

な

は

は

そ

の

ト

リ

お

な

は

み

見

て

や

止

み

な

ん

一

も

よ

な

じ

は

は

そ

の

守

り

め

の

タ

母

カ

切

ん
い
は
た
と
と
へ
ば
か
む
な
は
。

は
ア
ヤ
ア
イ
ロ
カ
ヘ
の
御
カ
か
づ
か
づ
レ
お

さ
も
外
き
か
い
ご
ろ
の
御
さ
か
づ
か
づ
レ
お

へ
だ
て
な
く
こ
で
そ
そ
そ
だ
す
け
た
て
な
し
に
。

お
じ
イ
は
く
か
く
の
お
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
。

まーさ じぐーおなじイ 子のネにで
 ノ あんーおぼえーあしがきの
 ベーだ てあーふ ひそーかなしけ エ
 詞 十四 日本一の店 機嫌にて。あれへ序 終りあ
 つて。春日の局をもつて申されトヘ 五郎 某
 が事は古機嫌めぐらばかり難くは間ま
 づまづまりトまじ 十五 ただ某に、序任せ

あつて。急いで席 終りトヘ 五郎 如何に、春日
 の局。時致が余りたる由 それぞれ申し
 トヘ 上音 席に合はず いつしか守乳母まで。心變りし春
 日野の。鬼ぶ火の野宿。出でてだに忍びは
 ぬぞや。詞 時致が余りたる由 それぞれ申
 しトヘ 母 あら不思議や。祐成は只今来り
 ぬ。九上の禪師は、寺にあり。それならで子

はなきに。時致といふは誰ぞ。や。今、思ひ出だしたり。箱根の寺にありしし箱王と云いし、元せ者か。それならば母が出家になれと申ししを聞かざりしほどに、勘當せしに。おしてこれまで來れるは。尚重ねての、勘當とや。伊豆箱根富士権現も、ま覺ぜよ。尚この後も、勘當と 五章 原無言に蘇

音 地 上音 遣戸トドケ 音 戸トド 音 を 音

立タチて添タマヘられタマハレて下アシばアシせんゼンと。

やヤるカたタむムなナきキ乙ヲの身ヒかなカナ。

うウたターアでアやヤせセめメてテいイまマひヒとト目メ。

らラアア原ハラ薰スギ心ハラちハラうウもモアア下アシりアシたタかカあア

すスけケなナりリはハ。

トリ

ヨイ合

かく ウ ども 知らで ときむねが。

とき うつりたかことよきか

と ちうもんを見やけつづは

ア やこなたへとまねけば

まねかれひやまのかせ

地 況 く 況 く きたりたり

きイ ヤア 部 上音 まね

シ 打たれてまおやのつえ

なつ かしければ 去りやらず

なつ かしければ 去りやらず

詞郎

さて ほ機嫌にて 尚重ねてのほ勘當と仰せ
出だされてひ△母ぬ々に詫かある 狂言 席前に
い 时致が事を申さば 祐成とともに勘當と申しき
當と申しきへ 畏つてひぬ々に申しき

時致の席事シテを席申シテしあらば。祐成ヒツヅルともに席勘當シテと仰せ出ハセたされてリ。まづ畏マジつたると申シしリへ。某タレなシする、子細コトハのリ間リ。誠シテたびは同心ドウシンにて、申シさうシテするにてリ。

五節
いやいや某タレは、まわりリまじリ。重タダ、席シテ余ナリ

いかに申シしリ。我等タレが親チヤウの、敵アキシの事モノ。世セに隠れなくリところに。餘りに、便タダなくリ間リ。

時致ヒツヅルが事モノを、申シし直シテし。連れて席狩シテりに出ハセべき所モノに。時致ヒツヅルが事モノを申シさば。祐成ヒツヅル共モに、席勘當シテとリや。よくよく是モノを、案シテじ見るに。總シテじて祐成ヒツヅルをもまコトとは思ハシメテひ給ハシメテはぬぞや。地シテたとひ時致ヒツヅルが家の職シテを申シすと。むろ祐成ヒツヅルに郎ヒツヅル等モなし。然ハシメテも身ヒツヅルに思ハシメテあり。れのれらスさへに見捨ハシメテづるかと。却ハシメテつて嘲ハシメテ叱ハシメテ

●獨吟

サシ郎

上音
(アシラ)

アシラ

トモ

アシラ

アシラ

アシラ

アシラ

アシラ

りひひてこそ。慈悲の母とも申すべけれ
●それに時致を法師にならぬとの席勘當。
たとひ作に従ひ出家仕りひども地我等

が車は世に隠れなし。あれ見よ阿彌が
子供こそ、敵を遁れんとの出家。既しく
弘法のためならずと同宿も思ひ廻しま
ば。心も染まぬ墨衣の浦鴻が子の竹根

寺にて。厭暮くやしと思ふならば。中止

か俗には苏るべし

ヤマ
平東ヤ
下奇

五指

セときむねは

トリ

はひ根にありしきしるいに。

カシミ

五指

法華經うい一ち部讀みおぼえ。

カシミ

五指

つねはどく諦いははうへの。

カシミ

五指

手	足	舟	車	金	地	ケ
も	た		ひ	は	お	
ア	ア		ア	ア	ア	
ハ	ハ		ア	ア	ア	
トリ	トリ	カ	カ	か	こ	
カ	を	お	お	か	ひ	
リ	さ	お	お	り	し	
場	ま	か	か	と	さ	
や	る	か	ら	へ	さ	
ア	ト	ぬ	ま	の	が	
す	席	の	ぞ	ご	ひ	
な	代	ぞ	み	ひ	と	
ど	な	み	な	ご	つ	
り	れ	り	り	ど	ま	
に		イ	ア	い	た	
。	。					

手	足	舟	車	金	地	ケ			
				の	か	ち	ろ	ウ	後
				三	ほ	か	く	△	し
ヤ	。			お	ど	ど	ま	ヤ	う
				ん	キ	に	ん	△	ぜ
カ	が			が	セ	他	ん	ヤ	。
リ	ん			ん	不	。	べ	ハ	。
頃	が			が	ね	の	ん	ヤ	。
	ん			ん	け	。	た	ハ	。
				を	う	に	ミ	ミ	。
				は	。	。	は	ミ	。
				い	。	。	ま	。	。
				せ	。	。	。	。	。
				ね	。	。	。	。	。
				ば	。	。	。	。	。
				ア	。	。	。	。	。

音便
 地
 不
 過
 次
 未
 ト
 諸
 略
 善
 全
 悪
 通
 事
 行
 律
 使
 亂
 也
 に
 は
 わ
 そ
 せ
 は
 く
 は
 は
 に
 ひ
 い
 ひ
 と
 ひ
 と
 よ
 げ
 ば
 は
 。

ト
 多
 事
 未
 ト
 略
 善
 全
 悪
 通
 事
 行
 律
 使
 亂
 也
 に
 は
 は
 に
 ひ
 い
 ひ
 と
 ひ
 と
 よ
 げ
 ば
 は
 。

もゆるすぞゆるすぞと
詫く詫く出てさせたまへばア
詫^{アシラセ}_{アシラセ}五郎^{アシラセ}きやうだいははうれしなき
に伏しまたいはうれしなき
詫^{アシラセ}地冠^{アシラセ}兄^{アシラセ}うだいははうれしなき
詫^{アシラセ}冠^{アシラセ}兄^{アシラセ}うだいははうれしなき
詫^{アシラセ}冠^{アシラセ}兄^{アシラセ}うだいははうれしなき
詫^{アシラセ}地冠^{アシラセ}兄^{アシラセ}うだいははうれしなき
詫^{アシラセ}冠^{アシラセ}兄^{アシラセ}うだいははうれしなき
詫^{アシラセ}冠^{アシラセ}兄^{アシラセ}うだいははうれしなき
詫^{アシラセ}地冠^{アシラセ}兄^{アシラセ}うだいははうれしなき
詫^{アシラセ}冠^{アシラセ}兄^{アシラセ}うだいははうれしなき

離子のと
省くこと
あり

詞母

詫^{アシラセ}威申すによつて時致が勘當、ゆるす

片地

で詫^{アシラセ}き居たアりやア

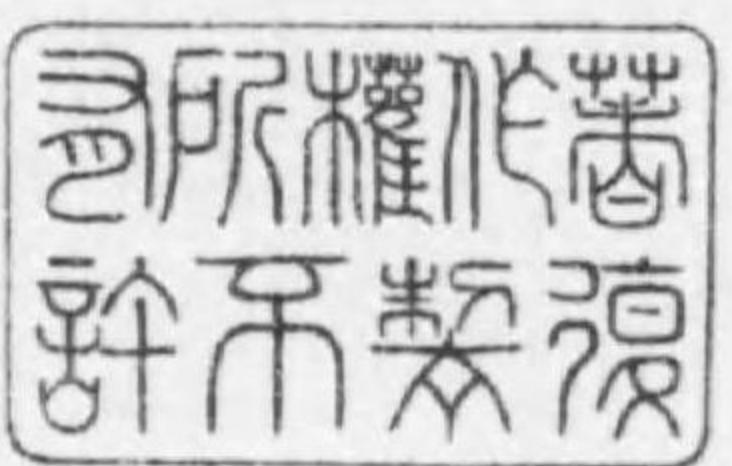
にてあるぞ。近うまいりて狩場への門出祝ひて声めりリへ^{+郎}ぬ夕に時致、近うまいりて、

この年月の声物^{シタモノ}詫申しふへさるにても

づくすごのほど^{カシミ}ときむねが。
平乗^{ヨクジヤウ}地^チ上音^{ヨコウモン}
つ^{トリ}いま^{トリ}か^{トリ}お^{トリ}子^{トリ}の^{トリ}

L70
PGJ

刷印日五月六年十正大
行發日十月六年十正大



著作者

東京府下多摩郡深橋町柏木百四十三番地
京都市上京區二条通髮屋町角

發行兼
印刷者

京都電話上二一九〇番
振替口座大阪三六一八番

田崎延次

之助



發行所

東京市神田區錦町壹丁目拾番地
東京電話神田二五二八番
振替口座東京三五五二番

檜大瓜堂書店



印刷所

東京市麹町區隼町貳拾壹番地
小林印刷株式會社

東京電話神田二五二八番
振替口座東京三五五二番

終

